

被災地の「いま」を発信する「みやぎ復興情報ポータルサイト」。津波被害のあった沿岸地域を中心に足を運び、記事を作成しました。NOW IS.取材班によるインタビューをはじめ、さまざまな書き手による、多角的な視点で情報を発信しています。

## BLOG いわたかれん 復興フォト

これまでの被災地訪問は90回を超える岩田さん。復興の「いま」を切り取った「写真」に想いを込めて、被災地の状況を発信中。親しみやすい文章と自然体な写真で、故郷が元気になっていく姿や宮城のいいところ、おいしいものを綴ります。

2018年12月10日更新



いわたさん撮影  
震災遺構としてそのまま残されている旧野蒜駅のプラットホーム。

いわたさん撮影  
津波被害を受けた方が荒浜の自宅跡を利用して作ったスケートパーク「CDP」。



2018年10月19日更新

自然体な写真で故郷の「いま」を綴る。

BLOG PICK UP

### 「宮城の夏」

2018.08.14更新

名取市のゆりあげ港朝市と日和山に立ち寄った後、商業施設「ロクファーム アタラタ」とジェラート屋「Natu-Lino」へ。東北では震災を乗り越えて再開したり、新たにオープンした店舗がとて多いです。今まさに東北は、「最強」です。

6次産業化や雇用創出に力を入れている「ロクファームアタラタ」。「Natu-Lino」のメロン半玉をそのまま使った看板メニュー！

執筆者PROFILE  
岩田 華怜  
仙台市出身の女優。AKB48を卒業し、被災地の「いま」を伝えたいと写真の勉強を始めました。

## BLOG NOW IS. 復興 インタビュー

被災地で活動する「人」の想いを知る。

2018年12月13日更新



代表取締役の三井紀代子さんの案内で防災体験学習型施設「KIBOTCHA」へ。

2018年12月14日更新



「KIBOTCHA」は東松島市・旧野蒜小学校を活用して運営されている。

被災地では、復興に向けたさまざまな取り組みを続けている方々が数多くいます。ブログでは、被災地を訪れ、精力的に活動する「人」にじっくりインタビュー。その活動内容、背景にある被災地や復興への想いを伝えています。

BLOG PICK UP

### 亘理町 「おらほのいちご」

2018.04.11更新

株式会社和苺代表の鈴木豊さんにインタビュー。震災でいちご農家を断念せざるを得ない仲間もいたなか、皆の熱い想いを受け継いで生まれた「おらほのいちご」。冬いちごと夏いちごの二枚看板を持ち、1年を通していちごを出荷しています。

「これが自分たちのいちご」と誇りを「おらほのいちご」は、できるだけ完熟に近い状態で出荷している。

執筆者PROFILE  
NOW IS.取材チーム  
今なお復興への道筋を歩む被災地の「現在」と「現実」を伝えるため、日々被災地を巡っています。

## BLOG 宮城発! 元気と食の 最新情報

「食」を中心に、被災地の元気な活動を伝える。

2019年2月12日更新



「多賀城古代米」を使った「百年農家の美人あまぎけ」の原料は全て自社生産米。

2018年11月9日更新



松島町の「お米やさんのおこわシリーズ」。季節に合わせて旬の食材を使用。

被災地企業や団体のさまざまな取り組みを紹介するブログ。宮城のあちこちで芽吹いている、今最も元気なトピックや注目グルメをピックアップしてお届け。被災地地域へのおでかけプランを考えるヒントもたくさん詰まっています。

BLOG PICK UP

### あられ愛、地元愛から生まれた 離乳食

2018.06.14更新

亘理町のあられ屋さん「みやぎのあられ」では、二代目の亮平さんの妻、美智代さんが、自身の子育て経験を生かした商品を開発しました。赤ちゃんに安心して食べさせられて、便利で美味しい「赤ちゃんあられ」は離乳食にぴったりです。

お湯でふやかせば離乳食になる「赤ちゃんあられ」。携帯も容易で便利。「みやぎのあられ」では、もち米を自社の水田で育てるところから手掛ける。

執筆者PROFILE  
一般社団法人 IkiZen  
震災復興に軸足を置き、被災地の企業の販路開拓や商品開発、広報活動支援などを行っています。

## BLOG 語り部が 本当に 語りたこと

語り部の本当の想いを文字で残していく。

東日本大震災での体験や、そこで得られた教訓を多くの人に伝えたいと、宮城県内の各市町村で活動を続ける語り部。いつもは語りかける形で震災伝承に取り組む語り部が、今本当に語り継いでいきたいことを文字で残し、伝えます。

2019年1月10日更新



一般社団法人ボランティアステーションin気仙沼の語り部・菊田忠衛さん。

2019年1月21日更新



一般社団法人気仙沼観光コンベンション協会の語り部・橋本茂善さん。

BLOG PICK UP

### 一般社団法人防災プロジェクト 中井政義さん

2018.11.07更新

2012年秋、石巻エリアで被災地の現状を伝える語り部ガイドをスタート。ガイド依頼者と会話する中で感じるのは、まだまだ国民の危機意識が低いということ。そこで私は伝える内容を工夫。「心の復興問題」に重点を置いて語り部をしています。

これまで約10,000名の方々のガイドをしてきた語り部の中井政義さん。被災地ガイドは、個人や各種団体の視察・研修などにも活用される。

執筆者PROFILE  
一般社団法人防災プロジェクト 中井政義  
石巻エリアでの語り部活動のほか、防災に関する悩みをwebで受け付ける活動も行っています。

## KEY PERSON

毎月1回11日に発行しているNOW IS.の広報紙では、被災地域を盛り上げていく人へのインタビューを掲載。長年地元で活動してきた人、震災を機にプロジェクトを立ち上げた人など、さまざまな人の声を届けています。



仙台中央タクシー株式会社 業務二課  
きくち まさお  
菊地 正男 さん

Vol. 25 で 震災前の街、避難のこと。自分の経験を持ち帰ってほしい。 in 仙台市

菊地正男さんは、タクシードライバー歴40年以上。「この年になって語り部をするとは思っていませんでした。でも自分の家が流されて、避難所でいろいろ経験をして、これは自分がしゃべらないといけないな、と。それで語り部に立候補したんです」。

語り部タクシーは仙台駅を起点に、荒浜や名取を案内するのが通常ルート。菊地さんは震災前と震災直後の航空写真を使って、どういう街だったかということの説明をするようにしているそうです。また被災後の数カ月を避難所で過ごし、その後仮設住宅に入った経験を生かして、避難の方法や避難所での生活を語ることも。「来た人が自分の地域に帰ったとき、役に立つような話をしたい」と、今日も菊地さんは語り部タクシーを走らせています。



語り部タクシーとして運行するクルマには、目印のステッカーが。

Vol. 26 で 震災は、私たちに大きな気づきを与えるきっかけとなった。 in 松島町



新しく整備された参道の杉並木。

国内外から多くの観光客が訪れる松島の象徴的な存在が、国宝瑞巖寺。その瑞巖寺のシンボリックな存在であった参道の杉並木は津波にさらされ、伐採を余儀なくされました。「震災では、自然には勝てないということを思い知らされました。松島は、本来あの世とこの世をつなぐ霊場。そこに人間が住まわせてもらっていることを忘れてはいけないし、原点に戻る時期が来たのだと思います」。

そうした“霊場松島”としての畏敬の念を込めたのが、震災の年から始まった「松島灯台会 海の盆」。稲富さんも立ち上げの際のアドバイザーとして活動しました。松島を想い、敬う。稲富さんは、これからもずっと、この地で祈りを捧げていきます。



瑞巖寺 管理課長  
いなみ けいichi  
稲富 慶雲 さん

Vol. 27 で 新聞という名の手紙を一軒一軒手渡しで届けていく。 in 石巻市



石巻復興きずな新聞舎  
代表兼編集長  
いわもと あきこ  
岩元 暁子 さん

岩元暁子さんが編集長を務める「石巻復興きずな新聞」は、岩元さん自身も携わり、石巻市の仮設住宅に地域情報を届けていた「石巻仮設きずな新聞」の後継紙。2016年に終刊が決まりましたが、続けてほしいという住民の声や、制作・運営スタッフの熱意に押され、岩元さんは「石巻復興きずな新聞舎」を立ち上げます。

活動内容は、「石巻復興きずな新聞」を通した訪問や見守り活動以外にも、地域の支え合いの仕組みづくり、県外ボランティアの受け入れによる震災の風化防止など多岐にわたります。「新聞というよりは『手紙』。そのつながりを通して、つらいと思う人たちが生きていてよかったと思える日が来るといいなと思っています」。



住民の声に耳を傾ける岩元さん。



青い鯉のぼりプロジェクト 共同代表  
いとう けんじ  
伊藤 健人 さん

Vol. 28 で 自分だけが誰かのためになる。100年後も続くプロジェクトに。 in 東松島市

毎年4月半ばになると、全国から寄せられたたくさんの青い鯉のぼりが東松島市大曲浜に掲げられます。これは“津波で命を失った家族4人に想いが届くように”と、震災当時高校生だった伊藤健人さんが始めた「青い鯉のぼりプロジェクト」。支援の輪は広がり、今や東松島市の復興の象徴になっています。「支援が広がるのはとてもうれしい。でも自分の心のキャパシティが追い付いていないようにも感じました」。

そう語る伊藤さんですが、共同代表の千葉秀さんに支えられ「自分のためにやっているプロジェクトでも、それが誰かの希望になって影響を与えていくんだ」と気付いたそうです。目標は、100年後も続く取り組みにすることだと話してくれました。



2018年の様子。子どもたちがつくった、手づくりの鯉のぼりも送られてくる。

Vol. 29 で 僕を育ててくれた宮城の海。そのすばらしさを伝えていきたい。 in 女川町



行方不明者捜索時の写真。海中には船の瓦礫が残っている。

女川駅前の「シーパルピア女川」でダイビングショップ「ハイブリッジ」を経営する高橋正祥さん。神奈川県ダイビングショップに勤務しながら、2011年6月から石巻・女川・岩手でダイバーとしてのボランティアを始めました。2012年に故郷の宮城に戻り、「ハイブリッジ」をオープン。「その時から『プロをここで育成しないと』という気持ちが強くありました」。

ここ数年、ファンダイビングのお客さまも増加。「震災後、海が怖いと思うようになってしまった人もいられるかもしれない。けれど僕はこの海のすばらしさを次の世代に引き継いでいく役目を、女川で果たしたいです」。これまでも、これからも、高橋さんは海とともに力強く生きていきます。



宮城ダイビングサービス  
ハイブリッジ代表&潜水士  
たかはし まさよし  
高橋 正祥 さん



カフェ はれま  
きくち ちひろ  
菊池 千尋 さん

Vol. 30 で よそ者目線で楽しみながら塩竈のよさを伝えていきたい。 in 塩竈市

鹽竈神社の表参道からほど近い場所にある「カフェ はれま」。オーナーの菊池千尋さんは多賀城市の出身で、自らを楽しげに“よそ者”と呼ばれます。「よそ者の目線で塩竈を歩くと、すごく面白い場所」と話す菊池さんは、塩竈にホッと落ちて休める場所を作りたいと思っていたそうです。

早期退職後に関わったボランティア活動をきっかけに、津波被害を受けた旅館遺構「旧糸びや旅館」の保存運動に参加。1階を借り受け、改修してカフェとしてオープンさせました。「塩竈を面白がってくれる人が増えて、街のよさを伝えていってほしい」。小柄な体にたくさんの情熱をこめて、菊池さんは「カフェ はれま」で休息を求め人々を迎えます。



築140年の梁や柱を残した空間。古道具などの販売も。

## KEY PERSON

毎月1回11日に発行しているNOW IS.の広報紙では、被災地域を盛り上げていく人へのインタビューを掲載。長年地元で活動してきた人、震災を機にプロジェクトを立ち上げた人など、さまざまな人の声を届けています。



株式会社 ささ圭  
常務取締役 商品開発 室長  
ささき ぎょう  
佐々木 堯さん

Vol.31 で  
お話を聞きました。

引き継ぎ、発展させ

“1番おもしろいかまぼこ屋”に。

in 名取市

東日本大震災の津波で、名取市閉上地区にあった3つの工場を消失した笹かまぼこ製造会社「ささ圭」。佐々木堯さんは、その3代目を継ぐべく奔走中。震災当時は東京の大学1年生。時間が許す限り東京と名取を往復し、仕事を手伝いました。「売り場を空けて待ってくださった取引先や、販売を楽しみにしてくれるお客さんがいたこと。それは祖父と父をはじめ、社員が築いてきた信頼があったからこそ。改めてすごいことだと思いました」。

卒業と同時に入社してからは、新商品「みやぎの栗」の開発や、海外への販路開拓にも挑戦。「1番おもしろいかまぼこ屋」といわれることを目指し、常に感謝の気持ちを忘れずに、さまざまな挑戦をしていきたいですね。



2012年9月に完成した新工場のそばには、直営店が併設されている。

Vol.32 で  
お話を聞きました。

気仙沼で何が起きたのか  
次世代に知らしめるために。

in 気仙沼市



いわゆる「ガレキ」のことを「被災物」と呼んでいる。被災物の展示は、津波の威力を示すものと、日常を伝えるものに分けられる。

リアス・アーク美術館の学芸員、山内宏泰さんは、郷土資料を収集する中で、気仙沼地域の文化形成に津波が大きく影響していることに気づきます。2006年には明治三陸大津波をテーマにした企画展を開催。警鐘のつもりでしたが、さっぱり人は入らなかったと言います。

震災後は、すぐに現場で調査・収集活動を開始。その結晶が常設展「東日本大震災の記録と津波の災害史」です。撮影した写真にはその時感じたことや考えたことを記し、被災物には「物語」を書き添えています。これは美術館としては前例がない取り組み。「人の心を直接揺さぶる展示にしないといけぬ。しかもこの災害は再び起きる。それを“次の世代に知らしめるための展示”だと考えています」。



リアス・アーク美術館  
やまうち ひろやす  
山内 宏泰さん

Vol.33 で  
お話を聞きました。

支援の継続と資金調達。

未来の森を見据えた取り組みを。

in 亶理町



NPO法人わたりグリーンベルトプロジェクト  
かとう かずお  
嘉藤 一夫さん

東日本大震災の前、亶理町の沿岸部を覆っていたクロマツの森の再生に取り組み続けているのが、NPO法人わたりグリーンベルトプロジェクトです。「海沿いには松があるっていう、当たり前だった景色を再生したい」と話すのは、代表理事の嘉藤一夫さん。植樹は2020年ごろまで段階的に進めていく予定です。

今、直面しているのは活動資金の問題。そこで着目したのが休耕地でした。取り組みを通じてつながった人たちの支援で、2018年は落花生の栽培をスタート。「森が育つまで長い時間がかかるから、世代交代しないといけない。若い人にとっても魅力ある団体にならないと」。嘉藤さんは50年後、100年後につながる取り組みを模索しています。



苗木づくりの活動を広げようと、苗木の「里親」制度もスタート。2年間自宅にて育て、3年目に植樹に来てもらう。



南三陸ワインプロジェクト  
ささき みちひこ  
佐々木 道彦さん

Vol.34 で  
お話を聞きました。

南三陸ならではのワインをつくり

多角的な産業振興を目指す。in 南三陸町

南三陸町入谷地区では、耕作放棄地を活用してブドウを栽培し、ワインの醸造を目指す「南三陸ワインプロジェクト」が2016年から進められています。2019年1月、ワイナリー設立のために「南三陸町地域おこし協力隊」として着任したのが佐々木道彦さん。復興プロジェクトでワイングラスの制作に携わる中で、ワイナリーをやってみたいという想いが芽生え、志願しました。

現在は経営の研修を受け、ワイナリー建設のための会社を設立する準備に奔走中。「まずは、南三陸の海産物に合うワインをつくること。ワインづくりを持続的な産業として発展させて、水産業や飲食業、宿泊業や旅行業などさまざまな産業に波及できたら」と夢は膨らみます。



入谷地区に植樹されたシャルドネ。1年目に  
して小さなブドウを実らせるほどに成長。

Vol.35 で  
お話を聞きました。

本当の心から出た言葉を  
発信することが寄り添うこと。

in 山元町



現在は、「つばめの杜ひだまりホール」でりんごラジオの足跡を展示。

2017年3月31日に閉局した山元町臨時災害FM「りんごラジオ」。伊藤若奈さんは、閉局の3日後、故郷の力になりたいという気持ちで入局しました。当初はライフラインなどの情報を放送。徐々に被災者やボランティアの人のインタビューが増えるようになりました。「取材が心の傷になっていないか、寄り添った取材ができたか、常に考えていました。本当に心の底から出てきた言葉を放送することが、寄り添うことだと思います」。

伊藤さんは現在、仙台でフリーアナウンサーとして活動中。「山元の人たちには、今も心を寄せている人がたくさんいることを伝えたい。私はいつまでも『被災地を忘れないで』という、本当の気持ちに寄り添いたいと思います」。



フリーアナウンサー  
いとう わかな  
伊藤 若奈さん

Vol.36 で  
お話を聞きました。

七ヶ浜のグランマたちに

編み物で「生きがい」を。

in 七ヶ浜町



Yarn Alive (ヤーン・アライブ)  
テディ・サーカさん

七ヶ浜町の高山外国人避暑地に暮らすオハイオ州出身のテディ・サーカさんは、約40年前に夫とともに来日。12年前に七ヶ浜町に引っ越し、東日本大震災を経験しました。

「震災後、私は友達と避難所をまわって、グランマ(=年配の女性)たちに『編み物をしない?』って聞いて回ったの。"やること"があったら、いつまでも元気でなくちゃいけないでしょ」。

こうして立ち上がったのが、「Yarn Alive (ヤーン・アライブ)」。次々集まってきたグランマたちが編んだ帽子やひざ掛けは、日本の被災地のほか、ネパールやヨルダンのシリア難民キャンプにも贈られました。こうして、編み物をするのが、七ヶ浜のグランマたちの生きがいとなっていったのです。



生き生きと編み物を楽しむグランマたち。